

緑内障と言われたんだけど・・・

0000

「緑内障」という病気があります。私達眼科の立場からしたら、緑内障の患者様は毎日沢山いらっしゃるし、緑内障は常に身の回りにある疾患ですが、患者様の立場からしたら、いきなり緑内障と診断されたら不安しかないと思います。

「まさか自分が・・・」
「この先どうなるんだろう・・・」
「本当に自分の眼は大丈夫か・・・」
「ずっと眼科に通わないといけないなんて・・・」



緑内障

言葉にできる不安も、言葉にできない不安も沢山あると思います。
今回は、その不安を少しでも解消できたらと思い、緑内障について書かせていただきます。

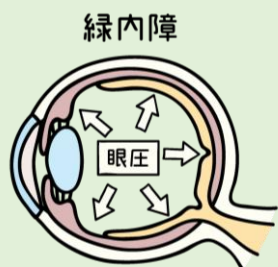
■不安は、眼科と患者さんのギャップから生まれます。

眼科は当たり前のように「緑内障です」と患者さんに告げます。もちろん医学的にみて緑内障の所見があればそれを告げるのは当然です。ですが、緑内障だからと言って、ただ緑内障を伝えるだけなら、患者さんは不安になります。誤解を恐れず言うならば、緑内障は眼科にとっては毎日何十人も目にする一般的な疾患ですが、患者さんにとっては、決して一般的な疾患ではありません。一大事なのです。その事を私達眼科が理解していないと、患者さんは不安で悩んでしまいます。

■単なる事実の説明では、患者さんの不安をおおるだけ。

初期の緑内障の診断を受けたら、こんな説明があると思います。「緑内障は眼圧により、視神経が傷つけられ、視野が欠けてしまう病気です。一度欠けた視野は戻す方法はなく、緑内障になってしまうと、治ることはありません。今後は視神経のダメージを最小限に抑え、進行を遅らせるために、点眼と定期的な通院が必要になります。緑内障は失明の原因の一番ですので

そうならない為にもしっかりと治療していきましょう。」
正解です。全部必要な内容です。眼科ならこの全てを言わなければいけない内容です。ですが、これだけだと、患者さんは不安になります。患者さんに残るのは「失明」という言葉ですから。「ああ、自分は失明する可能性がある病気になってしまったんだ・・・。しかも治らないなんて・・・」と絶望してしまう方もいらっしゃるかもしれません。



■医療機関は常に患者さんに最悪の可能性（リスク）を伝えないといいません。ですがそのことで、患者さんを不安にさせてしまう事実があります。

悲しい事実ですが、医療訴訟は絶えません。何か問題が起きた時、医療機関は訴えられるケースもあります。その原因の一つに「そんな事は聞いていなかった」という患者さん側の訴えがあります。ですので、医療機関はとにかく事前にリスクは説明するようにしています。その結果、どんなに可能性が低くても、常に最悪を伝えるようにしています。眼科で言えば、殆ど失明ケースはなかったとしても、可能性がある限り、失明する可能性があると言わないといけません。でも、伝えられた患者さんは不安になります。「大丈夫ですよ？」と聞かれても、医療機関であれば、安易に「大丈夫です」とは言えない事情もあります。大丈夫じゃない可能性がたとえ0.1%でもあったら・・・。

■大切な事はご自身の眼の状態を正しく知る事。

初期の緑内障は自覚症状はほぼありません。ですから、ご自身の状態は自分ではわかりません。眼科を受診して医師やスタッフから説明を受けて初めて状態がわかります。緑内障と言っても、様々なタイプの緑内障が

ありますし、同じタイプでも進行の状態も人によって違います。自分の状態がわからないと、常に最悪を考えてしまいます。楽観視してはいけない病気ではありますが、やみくもに心配して、失明の恐怖に怯え、生活にストレスをかけてしまっては、人生がもったいないです。大切な事は「正しく」緑内障を知り、ご自身の状態を知る事です。

■どうやって、自分の状態を知るの？

自分の緑内障の状態を知るのは、眼科から説明を受けるしかない就先ほど書きましたが、正直、患者さんに正確な状態を伝えることは非常に難しいです。緑内障の状態は検査の数値だけで判断できず、最終的には診察で直接眼の奥の状態を確認して医師が判断をします。医師が目で見た状態を患者さんにわかるように伝えるには限界があります。医師としては「今のところ大丈夫ですよ」「少し進んできたので目薬を変えてみましょう」「大分進んできたのでレーザーの処置をしてみましょう」など、言える説明は限られてしまいます。その中で患者さんができる事は、医師が話す言葉を信頼して、定期的に受診する事です。

■どこの眼科でも同じなの？

残念ながら、全く違います。緑内障が検査数値だけで判断できるなら、正確な検査ができればどこの眼科でも診断が同じになるはずですが、先ほども書きましたが、緑内障は最終的には医師の判断です。経験を積んだ（積み続ける）医師、勉強を続ける医師と、そうでない医師とでは診断も違ってきます。検査にしても、検査器械にもグレードがあります。最新の高額な器械と昔の器械とでは出せる数値の精度が違います。診察にしても肉眼では見えない部分だからこそ、なんとかより細かく見ようと沢山の器械を使います。置いてある器械が最新で、その器械が出す数値と画像と、経験と知識が豊富な医師の診断力が合わさって、より正確な診断ができます。そして、その後の治療の方針がたてられます。前にかかっていた眼科と違う事を言われた・・・という方もいらっしゃるのそういう理由です。緑内障は眼科選びがとても大切です。

■では、どうやって眼科を選べばいいの？

正直、緑内障に強い眼科かどうかを患者さんが見極めるのは難しいです。「〇〇先生は腕がいい」などと噂を聞く事もあるかと思いますが、残念ながら緑内障の腕の良し悪しは患者さんにはわかりません。つまり、口コミでは判断できません。ホームページは判断材料の一つですが、病院側の一方的な発信ですので、なんとも書けてしまいます。ですので、判断は難しいです。そんな中で、判断材料として有効なのが、医師の経歴です。開業する前に緑内障の強い病院で働いていたら、その医師は緑内障に強い可能性はあります。あとは、病院の施設です。検査器械が多かったり、よく器械の入れ替えをしているところであれば、緑内障に強い可能性もあります。ただ、器械は緑内障のものだけではないので、そこは判断が難しいです。医師が学会等に参加して勉強しているのかどうかも判断材料になると思います。診断も治療も日々進化しているので、情報や知識のアップデートは大切です。そして最後に判断できるのは「医院」としての説明です。大切な事は【医師】の説明ではないという事です。どんなに想いがあって知識や技術があっても、ぶっきらぼうであったり、厳しすぎて怖い医師も沢山います。じゃあ、その医師はダメな医師かと言ったら、患者さんとコミュニケーションが取れてないだけで、医師としてダメなわけではありません。大切な事は「医院」としてちゃんとできているかです。医師がしっかりしていれば、自分でコミュニケーションがとれなくても、その想いはスタッフに伝わってスタッフがちゃんと説明もするしケアもします。

■いとう眼科と緑内障

緑内障で大切なのは、早期発見と早期治療です。そして、生涯継続する治療だからこそ大切なのは、患者様と病院の信頼関係です。いとう眼科は緑内障に特化している病院として、これからも患者様の緑内障と向き合いたいと思っております。緑内障の診断は非常に繊細なものであるため、どうしても診察に時間がかかり患者様をお待たせしてしまう事もあります。また、より正確な診断をするために検査も多くなってしまいます。緑内障としっかり向きあうためには、患者にご協力いただく事も多くなってしまいますが、私達は緑内障を患者様と同じ気持ちになって考え、患者様に寄り添い、お互いに協力し合いながら一緒に歩んでいきたいと思っております。

